

全裸の雅美が、私に命じられるままにソファの前の絨毯の上に座り込んだ。

雅美が顔を上げ、私を見詰める。そのまだ涙の乾ききらぬ瞳には、脅えと、そして期待が込められている。

「脚を開け」

命じると、その瞳の表情を更に濃くした彼女が、両手を後ろに付いた格好で立てた膝をゆつくりと開きはじめた。

彰子と共にソファに座る私は、煌々とした明かりに照らされた居間の絨毯の上で、全裸を晒け出す彼女の染まった頬と、細かく震えながら開いていく膝を見詰める。

白い太股の狭間に、翳るような陰毛の黒が覗きはじめ、柔らかな肉襞がその愛液の滲んだ姿を見せはじめた。

股間に突き刺さるような二人の視線に、やはり恥ずかしさを覚えるのだろう、雅美が顔を逸らし、横を向く。

「顔を背けるな」

私が声を荒げると、彼女は観念したように、背けていた顔を正面に向け直す。

私は再び雅美にじつくりと視線を這わす。

首筋辺りで切り揃えられた髪、伏せ目がちな瞳、微かに涙の後が残る、紅く染まった頬、紅を知らぬ唇、細い肋骨が形良く浮き出すした肩、ちょうど私の手にすっぽりと収まりそうな、つんと突き出した乳首に飾られた乳房には、先程振われた鞭が残した二本の赤い筋が刻まれている。なだらかな腹部、臍、そして張り出した腰につづく長い目の太股、そしてその、二つの太股が作り出す台形の頂点の、陰毛に飾られた女の秘部は僅かに開き、その内部の濡れた桜色の部分を覗かせている。秘部の下端から少しの距離をおいて、陰った肌色をした後孔の窄まりが息衝き、絨毯の上で柔らかくひしゃげる尻へと続く。

私は手に持ったグラスを傾け、カミュの深い味わいと彼女の裸体を楽しむ。

空いたグラスに、隣に座る彰子が酒を注ぐ。

「もつと開け、お前の全てを見せるんだ」

私の言葉に、観念しきつた雅美が、命じられた通りに腰を突き出すようにして、脚を開く。太股の狭間の秘部が、その動きにつれて割れ、濡れて光る肉襞が私の目を引く。その視線を感じ取ったかのように、秘部の奥からは更に愛液を滲みだす。

割れた肉襞の狭間から、一筋の欲情のしたたりが零れ出し、その下の後孔に向かって垂れ下がっていく。

「手で開け……開いて見せろ」

私の声は自分でも解る程に掠れていた。

雅美が、絨毯に付いていた手を性器の両端に当て、唇から溜め息のような熱い息を吐く。命じられるままに秘部を割り、その内部の全てを他の視線の中に晒け出す事に昂ぶりを感じているかのように。

彼女が左右の肉襞に当てた両手を左右に引っぱり、陰唇を極限まで割り開いて見せる。細い手の指の狭間で、陰核の周辺の粘膜が開ききり、張りを見せ、その尖りを際立たせる。尿道口が横長に開き、その下の膣口が、内部の複雑な肉の凹凸を見せる。

私の見詰めるなか、膣口からゆっくりと白濁した愛液が滲みだし、垂れ下り、後孔を更に濡らす。

雅美が耐え切れない風情の声を漏らす。

私はそんな彼女の欲情しきつた声を聞き、鞭を手に取る。

剥き出しの秘部を鞭打たれる事を恐れたのか、一瞬、彼女が恐怖の表情を浮べる。

私は、鞭を彼女の開いた脚の間に向け、その先端を開き切ったで秘部に触れる。

「ああっ」

雅美が身体をびくりと震わせた。

私はそのまま濡れた表面を摩り上げるようにして、鞭の先端で尿道口を愛撫し、肉襞を捲り上げる。

濡れた鞭先が、秘部との間に細い銀色の糸を引く。尖りを見せる陰核を、捏ね回すように愛撫してやると、彼女の吐く息が乱れはじめる。陰核が持ち上がりだし、剥けた包皮の先端から瑪瑙色の球が覗く。鞭の先端でそれを弾いてやると、彼女が小さく悲鳴を上げ、愛液がまた一筋の糸を引いた。

そんな雅美に耐え切れなくなった私は、鞭をテーブルに置き、彼女の性器に手を伸ばす。

柔らかく濡れた女の肉の手触り。彼女は一瞬さえ私の手を避けようとはしなかった。

指の腹で膣口の回りを撫ぜ、ごく軽く中指を潜りこませると彼女の表情が歪み、膣口の筋肉が、指先を咥え込むようにして動き、後孔がそれに同調するように蠢く。

親指を陰核に当て、優しく、ゆっくりと押し付けるように動かすと、彼女が太股を細かく震わせ、その息が忙しくなる。

後孔がひくひくと断続的に窄まる。

そんな雅美を見詰めていた彰子が、私の耳に囁いた。

「見て、雅美のお尻の穴、さつきから貴方の指が欲しいって言っているわ」

そう言った彰子がソファに座り直し、再び雅美を見る。欲情の鈍い光を湛えているその瞳の下では、僅かに開いた唇を舌が舐め、小さく熱い吐息を漏らす。

私は雅美の膣孔に差し込んだ指を少しだけ奥に進める。彼女が顔をしかめ、筋肉の抵抗を感じる。私はまだ彼女が処女であった事を思い出す。

抜いた指で、すぐ上で小さく口を開ける尿道口に触れ、楕円形に開いた小さな孔を愛液で濡れた指で愛撫する。つづけて、固く芯を持ちはじめている陰核に触れ、ゆつくりと撫でながら、指の腹でその表皮をずり下げる。

雅美が軽く唇を噛む。

快樂の肉の芽を指で摘まみ上げ、ごく軽く、そしてゆつくりと指の間で揉み上げるようにしてやると、雅美が短い快樂の声を上げる。

感じる快感のままに細かく震える彼女の膝。時折閉じ、しかし私を見詰めて放さない瞳の下では、開いた唇がすすり泣きの混ざった声を漏らしつづける。

そしてその声が高まり、遂に彼女が言った。

「お、お願いです……。お尻も、お尻も翳って下さい」

固く閉じられた瞳から一筋の涙が零れ落ち、頬を伝う。そして一旦堰を切った欲望に、彼女は憑かれた者のようにその言葉を繰り返す。

私は、泣きながらも淫らな哀願を続ける彼女の表情を楽しみながら、指の動きを更に弱める。すすり泣きの声が高まり、腰を振り、欲求に応じようとしないうちに痺れを切らせた彼女が、性器を広げている手を後孔に向かって伸ばそうとする。

私は陰核を愛撫する手を離し、その彼女の手を掴む。もう片一方の手ですばやく鞭を取り、彼女の内腿に向けて振り下ろす。

！

白い内腿で鞭が鋭い音を発し、雅美の悲鳴が上がる。

もう一方の手で反射的に太股を庇った彼女が叫ぶ。

「ゆるして！ ゆるして下さい」

私はそんな雅美に畳み掛けるように言った。

「そこから降りろ、降りて尻を掲げる、自分で尻の穴を翳ろうなどという淫らな女は、たっぷりと鞭を食らわせて、罰を与えてやる」

雅美が、涙に濡れ光る瞳を私に向ける。私はまたもや、その彼女の視線が期待の感情を隠している事に気付く。

私の暗部で、猥欲と言う名前の獣がその血走った目を開く。

私は二つの手錠を淫具の収められた箱の中から取り出し、ソファから立上がる。

そんな私の隣りでは、彰子がソファに座ったままで脚を開き、スカートを捲くり上げる。

彼女は、既に濡れて半ば透けはじめている下穿きの上から、秘部を愛撫しはじめる。途端に押え込んでいた快感の音が唇から漏れだし、その視線は淫らな期待をもって私に向けられる。

雅美が嗚咽しながら、私に尻を向けた格好で絨毯の上に這い、尻を大きく持ち上げて掲げてみせる。

私は床に膝を付き、そんな雅美の両手を彼女の足に向けて引き付け、両方の手首と足首を手錠で固定する。

そうされる間も一切の抵抗を見せなかった雅美は、肩と顎を絨毯に付け、尻を掲げ、極端な前屈の姿勢のまま、手錠によって拘束された姿を私と彰子の前に晒し、悲しげに手錠を鳴らしてみせる。

私は雅美の背後に回り込み、高く掲げた尻と、そこから首に向かって続く背中中の曲線を見る。足を彼女の左右の脚の間に差し入れ、横に払うようにして更に股を開かせる。

尻の豊かな肉の半球の狭間では、濡れた性器と後孔がこれから受けるであろう、苦痛と快感の期待に蠢いている。

私は鞭を取り上げる。そしてそのまま、今朝のエンプーサが残した爪痕が、赤い点として残る雅美の尻に鞭を振り下ろす。

！

分厚い肉を打つ時の音が居間に響き、押し殺した悲鳴が上がる。その悲鳴が私には、性交による絶頂を味わったときの女のそののように聞えた。

私は鞭を振るいつづけ、嗜虐の卓に供せられた雅美の尻を打ち、苛む。その度に赤い線が震える白い尻に刻印されていき、彼女の上げる悲鳴が私を楽しませる。

鞭打たれながら、彼女の性器は女の蜜を吐きつづけ、既にその悲鳴は甘く、ねだるような口調を帯びている。

私は狂った者の執拗さで、鞭を振るいつづける。

鞭を振るう腕が、重くだるくなる。

私は鞭を床に投げ捨て、私の行為によって無残な傷を付けられ、赤く染まり、腫れる雅美の尻を見下ろす。

私の背後で彰子が、押し殺していた自慰による快感の声を高めはじめる。

「ああ、もっと、もっと見せて、雅美がよがるところを、そのこが鞭で打たれて泣くところを、嫌らしく濡らすところを」

私はカミュの瓶を取り、グラスになみなみとブランディを注ぐ。大きく一口飲んでから床に膝を付き、絨毯に這っている雅美の顔の前に差し出す。

彼女の顔は上気し、頬を染めたそれは明らかに快樂を味わっている女のものだった。

私は彼女の髪を掴みんで上を向かせ、その唇にグラスを当ててやる。

こくりと一口のブランディを彼女が飲み下した時、私は、飲み残したブランディが入ったグラスを、傷ついた彼女の尻の上に持っていき、傾けた。

濃い琥珀色をした液体が、雅美の尻に降りかかり、小さな飛沫となり飛び散る。

部屋に豊潤な香りが広がり、鞭によって付けられた尻の傷口をアルコールに焼かれた雅美が悲鳴を張り上げる。彼女は尻を激しく振り、腕を拘束する手錠が甲高い金属音を鳴らす。

私は、その彼女の苦痛の悲鳴と身体のもだえを楽しむ。

欲望が更に昂ぶる。

私は彼女の尻の前に膝を付き、ブランディに濡れた尻を撫で回す。両手の親指を尻房にかけて押し開くと、カミュの香りと愛液の匂いが混じり合った芳香が濃厚に香り、そのまま私は、その箇所を口を押し当てる。

ブランディの味と愛液のぬめり、そして肉厚の襞の舌触り。舌先を膣口に当て、そのまま襞の一つ一つを捲り上げてやると、新たな愛液の味と暖かさを感じる。

雅美が、舌で愛撫される快樂の声を上げだした頃、私は、柔らかく繊細な彼女の襞に歯を立てる。

彼女が驚きと苦痛のうめき声を漏らし、腰を引こうとするが、私はその腰を押えつけ、更に強く、柔らかな粘膜に歯を立てる。

膣口が、その感じている苦痛を示すかのように窄まった。

私は彼女の奥の秘めた箇所を歯形を残し、性器から口を離す。

欲情の愛液と私の唾液によって濡れる雅美の肉襞。その肉襞に赤く刻印された歯形。私の目が次の苛みの標的である、後孔の窄まりを捉える。

「箱の中から、縫針を出せ」

私は、背後で淫らな自慰をつづける彰子に言った。

その言葉を聞いた雅美が泣き声を上げ、彰子がこれから目前で繰広げられるであろう残酷な行為に息を飲む。

そして私は、そんな二人の女に向けて、押え切れない笑い声を上げる。

彰子が私に、自分の愛液で濡れた指でつまんだ細く長い縫針を差し出す。

私はその針の先端の鋭さを見詰め、この鋭さが雅美に与えるだろう苦痛を思う。

私は雅美の尻の厚い肉を再び撫で回し、その張り弾力を楽しんだあと、針の先端をその赤く色づいている肌の表面に当てる。

針の感触を感じた雅美が、喉の奥で悲鳴を上げる。小さく首を振り、これから味わうであろう苦痛と、そしてその苦痛を求めている自分に対してすすり泣く声を上げる。

私は針先を尻に押し付ける。小さくその先端が尻に窪みを付け、そして表皮を突き通り内部にすべり込む。

その瞬間、雅美の太股が緊張し、股間に腱が張り詰める。

悲鳴が上がる。

私は針を尻肉の中に更に進め、そして一気に引き抜く。赤い血がその小さく深い傷口で丸い球を作り、尻を濡らしているカミュと混ざり合い、そして流れ落ちる。

私が、何度もくり返し彼女の尻を針で責めつづけるうちに、彼女の上げる悲鳴が甘く変化していく。

秘部から溢れだした愛液が太股にまで垂れ下り、絶頂を迎えようとしている女のような息遣いに身体が震える。

「もっと、もっと刺して。もっと私を、淫らな私を、いたぶって」

その雅美の哀願に答えるように、私は針を、彼女の欲情しきった秘部の上で苦痛を待ちつつけている後孔に当てる。

それを感じた彼女が、後孔の筋肉を蠢かせたとき、私は一気に針を進める。その瞬間、彼女は甲高い悲鳴を上げ、身体を大きく震わせた。

私は、針を刺された後孔の筋肉がひくひくと動くのを見詰めながら、股間の陰茎から滲みだした粘液が、下着を汚している微かな冷たさを感じる。

彰子が、私の背中から身体に手を回し、抱きついてくる。

「雅美のお尻を味わってごらんさいな……。ちゃんと舐てありますわ、男の方をお尻の穴で悦ばせる術は……」

彰子が私のスポンの下ろし、下着を擦り下げる。剥き出しとなった私の陰茎は、その張詰め濡れた亀頭を電灯の光に鈍くと輝かせた。

彰子が妖艶な微笑みを浮べたままで、私の陰茎を見詰め、淫具箱の中から軟膏の瓶を取出す。

彼女は両手にその脂の混ざった軟膏をたっぷりと取り、陰茎に塗り付けはじめる。軟膏が陰茎の熱で柔らかく溶け、亀頭の先端から滲む粘液と混ざり合っていく。

私は彰子の手の感触に、押し殺した快感のうめき声を上げる。

「さあ、雅美のお尻を楽しむのよ、亡くなった主人がそうしたように。もうこのこは一年以上も男の方を受け入れていないわ……。このこの淫らに泣く声を私に聞かせて、お尻に男のものを受け入れて、よがり狂う雅美の姿を私に見せて」

私は、ギラギラと狂暴に輝く淫茎を振り立てて雅美に近づく。

彼女の後孔に刺さった針を抜いたとき、その鋭い痛みにも、またも彼女が小さく声を上げるが、

その尻は、私を誘うかのように蠢きを見せた。

私は両手で尻を掴み、微かな血で飾られた彼女の後孔に、固く張詰め、粘液と軟膏に濡れた亀頭を当てる。

彼女がその感触に、はつきりとした期待の声を上げる。

私は問い掛ける。

「入れて欲しいか？」

雅美が肯き、限界まで耐える事を強要されたような、切羽詰った声で叫ぶ。

「はい……」——「入れて、入れて下さい、私のお尻に。私を貴方様のもので犯して、淫らで墮落した私を罰して、私を痛めつけてっ、あっ！」

その彼女の声が終わらないうちに、私は腰を尻に向けて押し付ける。亀頭が後孔を押し下げ、そして筋肉の輪が徐々に開き、飲み込みはじめる。

強い抵抗があった。その苦しさに彼女が、まるで絶頂を迎える時のような声を張り上げ、そして大きく息を吐く。

私は更に腰を押し付ける。

亀頭が彼女の後孔に潜り込み、筋肉の輪が窄まる。その甘美な圧力を味わい、一気に陰茎を内部に押し進める。

淫茎によって切り開かれていくような挿入感に、彼女がはつきりとはた絶頂の声を上げる。

私は、陰茎を根元まで彼女の尻の中に収めきり、そしてそのまま暫し動きを止める。

雅美が私を受入れた後孔の筋肉を蠢かしはじめる。私はそれによって感じる快感を味わい、先程の彰子の言葉を思い返す。

——「ちゃんと躡てありますわ、男の方をお尻で楽しませる術は」——

私は雅美の尻を味わいながら、ゆつくりと腰を前後に振りはじめる。その私の動きに合わせて、彼女が尻を窄め、快感を味わい、そして私に送り込む。

私はその快楽を存分に味わい、腰を振りつつけるうちに、彼女は身体を震わせて快楽の声とすすり泣く声を上げはじめる。

彼女の秘部から溢れ出した愛液が私の太股を濡らし、そして彼女が尻の快楽に身をよじり、声を張り上げ、忙しない息を吐きつつける。

更に強い圧力が私の陰茎を締付け、内部の粘膜が引きつり、私は強い快楽を覚える。

私の中で射精の衝動が生じ、膨れ上げる。

雅美が自ら、尻を私に向けて押付け、引く。その動き早くなり、背中が急なカーブを描き、腰が淫らな踊りを舞いはじめる。

私の中で衝動が押さえ切れないものにまで成長する。

私は雅美の後孔のゴムのような締付けの中で、強く、長い快楽を味わいながら精を放つ。

その瞬間、私の視野は白く飛び、全てが脳裏から消滅する。無意識のうちに、獣のような声が私の喉から迸る。

まだ動こうとする雅美の尻を力一杯に押えつけ、私は射精の余韻を貪る。そして、この淫らで強烈な快楽は、その快楽が背德的であるが故に私を、決して捉えて離さないであろう事を自覚する。

私は、それでもまだ蠢こうとする雅美の尻からゆっくりと腰を離す。

陰茎が抜け出した後の彼女の後孔は、暫くの間、口を開いたままになり、そこから零れ出した白濁が垂れ下がり、愛液で濡れた秘部を汚していく。

彼女が深いため息を吐き、後孔を窄めると、その動きに同調して、精液で汚れた膣口が蠢いた。私はぐったりとソファに腰を下ろし、彰子が差し出すグラスを取る。

痺れたような快楽を味わった後の脱力感の中で、カミユの豊潤な味わいが喉の乾きを癒している。

そんな私の前で、彰子が立上がり、雅美の手首と足首を繋いだ手錠を外した。

擦り切れた赤い輪が雅美の両手首と足首に残っていた。彼女がふらつく身体を起し、絨毯の上に膝をつく。そしてその横では、彰子が服を脱ぎはじめた。

絨毯の上を這い、にじり寄る雅美と、全裸になった彰子を見たとき私は、まだこの二人の女にとつては、夜が終っていない事を知った。

雅美がソファに座る私の両膝に手を掛ける。彰子が私の目を覗きこみながら、もうすっかり見慣れてしまったあの、淫らな笑みを浮べた。

ソファに座る私の脚の間に身を置いた雅美が、私の股間で力無く垂れ下る陰茎を、唇から伸ばした舌で舐ぶり、そして、精液と軟膏で汚れ、自分の尻の中について先程まで挿入されていたそれを口に含む。

彰子が、淫具を収めた箱の中から巨大な陰茎を象った木製の器具を取り出す。その淫具は幾度も女の蜜を吸い、それを秘部に挿入され、粘膜を擦り上げられた女の快楽と苦痛とによって、黒く鈍く光り輝いていた。

彼女はその木製の陰茎を両手で捧げ持ち、雅美によって陰茎を清められながら彼女を見詰める私の視線を意識しながら、その表面に舌を這わす。

雅美と彰子の行為によって、私の腰の奥底からは、既に消耗してしまった衝動が再び沸きこりはじめる。

そんな私の目前で、彰子が見せ付けるように脚を大きく開き、その頂点の陰毛の中にうずくまる秘部に、空いた手を伸ばし、肉襞を自らの指で慰めはじめた。

淫らな自慰に耽っていたその秘部はすぐに愛液のぬめりを見せた。彼女は早くも荒くなった息を吐きながら、愛液で濡れた指で乳房を掴み、固くなった乳首を指の間でこね回しはじめる。そ



してもう片方の手は、唾液で湿した木製の陰茎を、大きく開いた股間に持っていく、濡れた膣口にあてがう。

木製の陰茎が殆ど垂直に押し上げられると、巨大な木製の亀頭は、彼女の秘部全体を突き上げ、そして歪ませる。

彰子の顔が歪む。

とても挿入が不可能だと思われたその時、先端がゆっくりと、そして残酷に彼女の膣を引き裂くように広げ、埋没しはじめる。

彼女ははつきりと苦痛の表情を浮かべ、喉から絞り出すように声を漏らす。しかしその開いた膣が浮べる表情は、ぞつとする程淫らで、快楽の期待に充ちたものであった。

雅美が、勃起しだした私の陰茎を更に強く吸い上げる。彼女の紅を知らぬ唇の狭間で出し入れされる、まだ柔らかさを残す陰茎が歪み、私を見上げた彼女の膣が、視線に絡み付く。

彰子が、木製の淫具の亀頭を膣の内部に収めきる。極端にまで開いた彼女のそこは、裂ける寸前にまで張り詰めた肉壁をくすんだ木製の器具の表面に貼り付けていた。

彼女は一旦息を吐き、そして更に淫具を押し上げ、その根元近くまでを深くくわえ込んだ後、無残な程に歪んだ秘部を私に向けて突き出す。

「見て、淫らな私を見て下さい……」

そしてそんなうわ言のような言葉をくり返ししながら、淫具を掴み、ゆっくりと前後に動かすはじめた。

愛液で濡れ、いつそう黒光りを増したその淫具は、彼女の開き切った膣口の粘膜を引きずり出すように動き、そして再び内部に戻る。

私の開いた脚の間で、勃起した陰茎を啜る雅美が顔を離し、そして私に囁く。

「立ってください……」

その雅美の言葉に誘われるようにソファを立ち上がると、雅美が私の背後に回り込み、そして私は、彼女の手が尻にかかるのを感じる。

微かな雅美の吐く息が尻の狭間にふりかかり、その中心部にぬるりとした暖かい彼女の舌が触れるのを感じる。

陰茎に感じられるのとは別の種類の快感が私の下半身を走る。彼女の舌が、その舌で触れた部分を這い、舐めまわしはじめる。

陰茎が完全に勃起した。

彰子が、その雅美の舌が与える快感を味わう私の手を取り、股間から生えたような、愛液に塗れた淫具に触れさせる。

「動かして……貴方の手で、かき回して……」

雅美の舌が、私の内部に潜り込もうと押し付けられる。

私は、彰子の秘部から覗く淫具の先端を掴み、ゆっくりと引き出し、そして再び埋没させる。手に感じる強い秘肉の抵抗が、私を楽しませる。

雅美の舌が、窄められた肉の輪を割り、その内部に差し入れられる。強い快感がその部分から勃起した陰茎に向かって突き通る。

雅美が舌を蠢かす。

彰子が淫具を掴む私の手を止め、そして背中を向けた格好で絨毯に這いつくばり、尻を掲げる。

「このまま……、このままお尻に下さい、お願い……」

そう囁きながらも彼女の手は、秘部に埋まった淫具を掴み、ゆっくりと出し入れしている。

私は軟膏の瓶を取り、彰子の後孔に塗り付ける。うす青い軟膏で濡れた指が、柔らかなゴムのような彼女の後孔の筋肉を押し分け、その内部に潜り込む。

「ああ……」

指を挿入された彼女が快樂の声を漏らし、そして、罨られる尻孔を窄めてみせる。

「早く……お願い、早く……」

顔を向けた彰子が囁いた時、私の内部を舐めつづけている雅美の舌が、ある部分に触れ、苦痛に近い快感を私は覚える。その断続的な快感は、勃起した陰茎をひくひくと痙攣させ、その先端から新たな粘液を滲み出させた。

私は彰子の尻に手を掛け、濡れた亀頭を軟膏に塗れた後孔に押し当てる。

彰子自分から尻を押し付けてくる。

「女がこう……するのが好きなのでしょ、貴方……。お昼のお風呂場でも……そうでしたわ……」

昂ぶりと苦痛、そして快樂によってその彼女の声は切れ切れに途切れていた。

膣に淫具が入っている為に、よりいっそう彼女の後孔は狭く、そして窮屈だった。

埋没していく陰茎に、すぐその下の秘部の、彰子が操る淫具の動きが伝わってくる。私は彼女の尻肉を強く鷲掴みにし、そして一気に陰茎を突き入れる。

彰子が重く甘い苦痛の悲鳴を上げた。

そして同時に、後ろから私の尻に顔を押し付けている雅美が、激しく舌をくねらせた。

強烈な快感と獣欲が私を翻弄する。

私は、その欲情のままに手を彰子の尻に力を込めて打ちつける。腰を激しく突き入れ、そして引く。

居間の中に、私が張り上げる快感のうめき声と、彰子の上げる悲鳴が突き通り、そして熱い息遣いの音が満ちる。

雅美の舌が与える快樂と、彰子の後孔の快樂とが、私の中で混ざり合い、そして融合する。

私の中で何か弾け、そして飛び散っていった。

以下、次回へ